

荒谷 卓(あらや たかし)
生年月日:昭和34年秋田県出身
略歴:昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。
海外留学:ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月~30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会:熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書:「戦う者たちへ」並木書房 / 「自分を強くする動かない力」三笠書房 / 「サムライ精神を復活せよ」並木書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>



日本の戦闘者

平成3年、幹部指揮幕僚過程(通称CGS)を卒業した俺は、第1空挺団空挺教育隊に補職された。精鋭無比を掲げる陸上自衛隊の精鋭部隊だ。ここでも、毎日の仕事の終わりは隊員と気力・体力の勝負。今でも親しくしている中村尚人等腕自慢・体力自慢の空挺兵と相撲、フルコンタクトのスパリング、習志野演習場の駆け足で一日を締め。職務上の俺の任務は、空挺運用や空挺装備品の研究開発であった。

空挺作戦は、輸送機を連ねて敵の防空網をかいくぐり敵後方に戦闘降下しなければいけない。これほど防空能力の向上した現代戦において、輸送機が敵の防空圏内に突入するということは極めて困難な作戦である。そのため、敵の対空ミサイルの射程外の高高度から落下傘で降下するかの、敵のレーダー等監視システムに見つからないような超低空飛行で潜入して降下するかしないか。前者は、自由降下(フリー・フォール)と呼ばれる特殊技能を必要とするため小部隊の潜入には適するが部隊主力の降下には適さない。つまり、空挺作戦の主力部隊は、超低空で飛行する輸送機から降下しなくてはならないということだ。地上レーダーなどの監視システムに見つからない対地高度50m以下だ。ただし、50mからではパラシュートは使えない。対地高度50m以下で飛行し、空挺作戦地点に到着する時に高度を上げて降下する空挺作戦の戦術的超低空降下とは対地高度約100m以下だ。

また、現代戦では、個人が携行する装備品が多いため、落下傘で吊るす重量が非常に大きくなる。しかも空挺兵は図体がでかいので、必然的に落下傘の吊下重量性能は飛躍的に大きくなる。だから、現代の空挺作戦のためにはそれまでの落下傘より50%近く向上した吊下重量性能が要求される。

他方、現代戦では兵士が地上で密集するのは敵火力の餌食になるので、できるだけ広く分散して行動する。目視や号令で意思疎通していた古いスタイルの指揮統制は、空挺降下において集団密集降下(隊員が連続して輸送機から降下すること)を必要としていたが、指揮通信機材の発展により個人が携行するモニター上で指揮統制が可能になったことで、輸送機からの降下要領は、隊員間ができるだけ間隔を置いて降下する戦術的分散降下に代わった。したがって、年の初めに空挺団の「降下始」で展示しているような隊員が次から次に降下する原始的降下要領はこの国でもやっていない。このような現代の作戦上の要求から、当時の60式空挺傘では空挺作

戦遂行が不可能であった。

そこで俺は、現代の空挺作戦に適合する落下傘の開発について国産メーカーに問い合わせると「なんで変える必要があるんだ。そんな必要はない」と天下りのOBが偉そうに答えた。おいおい、どうなってんだと陸上幕僚監部の担当に問い合わせると「国産メーカーには研究開発能力がないからしょうがない」という。「そんなんじゃないでしょ」というと、偉い人が出てきて「若造が装備行政に首を突っ込むな」ときたもんだ。俺は、こいつらを皆殺しにしようとする、先輩から「そんなことしても何も変わらない」とたしなめられた。俺は、「そうですね。わかりました」というわけにはいかないので、こちらの期待する性能に適合しそうな落下傘を海外で見つけることに決めた。

そのため、休暇を取って自費で海外のパラシュート・メーカーを訪問してテストジャンプすることにした。候補に挙げた落下傘はイギリス、フランス、ドイツ、ロシアの4社の軍用低高度落下傘。最終調査でイギリスとフランスの落下傘に絞った。

海外のパラシュート・メーカーは、国産メーカーとは違って、開発コンセプトも研究開発試験設備も完備されたしっかりした会社であった。それぞれの会社が開発した新型空挺傘の説明を受け、その傘を使ってのテストジャンプを正式に申し出た。

フランスでのテスト・ジャンプは3回。彼らは、最大超過重量(最も重い装備を携行しての降下)で最大機速(マル秘)、最大地上風速(20m)での降下を準備した。日本では絶対にできない条件での降下である。携行重量を正確にセッティングするため水ポリタンクで調整した。空挺団での降下訓練時の携行重量よりはるかに重い重量だ。この荷物を装着してセスナに搭乗するのも大変だったが笑顔で手を振り離陸した。セスナはどんどん高度と機速を上げる。機速が一定したところで今度は高度を下げて降下ポイントに潜入。地上の風速を示す吹き流しは真横を向いて末端がバタバタとはためいてる。かなり強い地上風だ。セスナも強風の影響で安定しない。オープンになったセスナのサイドドアの前でスタンバイしていた俺はジャンプの合図を待っていた。機体が大きく横揺れした直後、ジャンプのサインが出た。一気にドアから飛び出そうとした。ところが、セスナの機体の横揺れでポリタンクの中の水が振れだし、さらに新幹線よりはるかに速い速度で飛行するセスナの外からの風圧は強烈でドアから機外に踏み出せない。1回目のジャンプはドライ



陸自空挺の主傘・予備傘等を一式装着した筆者。

(降下せず)。日本の戦闘者として恥だ。2回目は絶対に飛び出す。ドアにすり寄って身構える。オン・コース。ジャンプのサインが出る。同時に左手を機外に出して掌で空気を受ける。すると一挙に身体がセスナの外に引きずり出され、きりもみ状態で空中に放り出された。ライザー(落下傘から人を吊るす2本の帯)がぐるぐる巻きにねじれた状態で開傘(パラシュートが開く)。低高度降下用の落下傘は空気透過率がゼロ。その傘が、高速

のセスナから飛び降りて開傘するときの衝撃は新幹線が最高速度で走っているときに急ブレーキを踏むより強い力が働く。骨という骨が全部ばらけるような強烈な衝撃であった。さらにその衝撃で、ねじれて首に巻き付いたライザーが首を絞めた。目が飛び出て息ができない。急いでねじれを戻すが、低高度からジャンプしているので直ぐに地上が近づいてくる。体に結び付けている水のポリタンクを着地前に切り離さないと重量の負荷で足が折

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
代表: 荒谷 卓



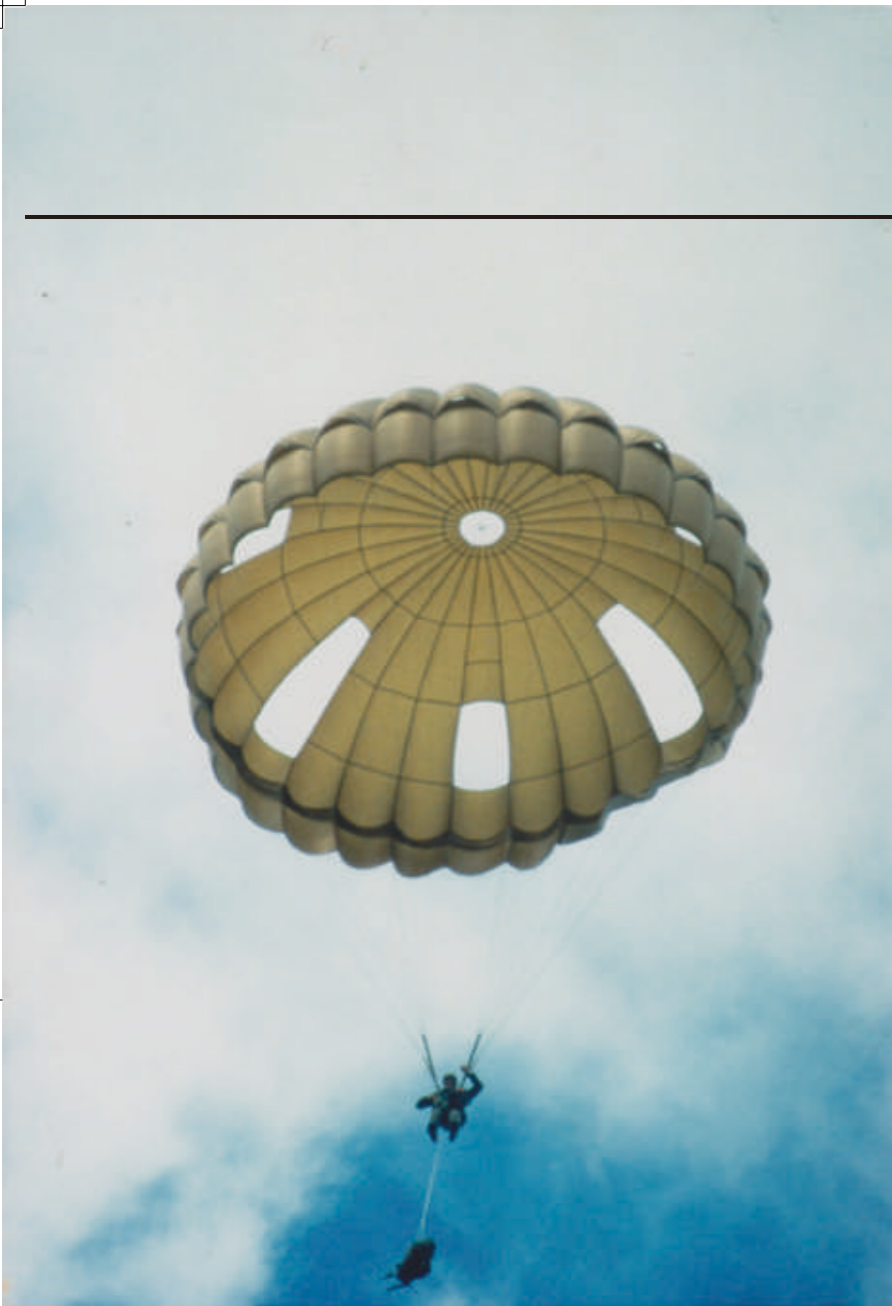
れる。地上ぎりぎりポリタンクを切り離し骨折は免れたが、地上に先に着いたポリタンクがアンカーのように働き、20m以上の地上風に煽られた落下傘に引っ張られて俺の身体は真横になった。落下傘は風をはらんで物凄い勢いで俺の身体を引きずる。地上を高速で引きずられてジャンプスーツはボロボロだ。ようやく落下傘を切り離し立ち上がると顔から首にかけてヌルヌルする。手でこすると血だ。どうやら俺の口から血が流れ落ちているようだ。落下傘会社のスタッフが車で近づいてきて恐ろしい顔をして俺を見る。「大丈夫だ」と言おうとしたが声が出ない。どうやら開傘衝撃で食道を切ってしまったらしい。フランスのスタッフが心配して「2回目は辞めたほうがいいのでは」というから、「サムライは死んでもやめられないだ」と答えた。

その夜は、フランス人が「日本のサムライのために食事をおくる」と言って高そうなディナーに招待してくれたが、食道が切れていたため目の前の美味しそうなフランス料理は一口も食えなかった。それでも、消毒のためにワインだけは頂いた。美味かったが喉に激しく沁みだ。

フランスでのテストジャンプを終え、イギリスのパラシュート・メーカーを訪問した。親子代々のパラシュート職人というおっさんが自慢げに落下傘の説明をしてくれた。イギリスでのテストジャンプは、超低高度からのジャンプを準備してくれた。1回目は対地高度200m、2回目は100m。100mから自由降下で落下傘が開かなければ、地上までは約



空挺レンジャーの障害物走シーン。



フランスでテストジャンプした空挺傘。

4.5秒、時速約160kmの速度で地面に衝突する。ちなみに空挺団の降下は300m以上の高度で、日本では法律上、習志野のような市街地では対地高度100mからの降下はできない。

俺は質問した。「この落下傘で低高度降下のテストジャンプはしたか」。彼は答えた。「もちろんだ」「ただし、ダミー（人形）でだ」「お前はラッキーな奴だ。俺の落下傘の最初の人間のテスト・ジャンパーになれるんだからな。いいおっさんだ。会社のスタッフがすぐ補足した。「君と一緒に英国のパラシュート連隊所属の有名なフリー・フォール専門チーム「レッド・デビルズ」と一緒に降下するから心配ない」と。

翌日、飛行場でレッド・デビルズの連中と会う。「お前は勇気のある日本のサムライだ」「よろしく」。簡単なあいさつを交わし-



レッド・デビルズと装備を装着する。

緒にセスナに乗りこむ。普通、落下傘で降下するときは、主傘にトラブルがあった場合に備え必ず予備の落下傘も装着するのだが、低高度ジャンプでは予備傘を使っても間に合わないから着ける必要はないということだ。命を守る予備手段がないというのは心細いものだが顔には出さない。セスナが離陸すると、「ところで誰からジャンプをする？」とレッド・デビルの連中が言い出した。俺は、世界的にも有名なフリー・フォール集団のレッド・デビルズが当然先にジャンプするものだと思っていた。ところが、「せっかく日本からサムライが来ているのだから彼にトップ・ジャンパーを譲ろう」という。日本のサムライと言われたのでは引き下がらわけにはいかない。俺は「もちろんだ。ありがとう」と答え、直ぐに飛び出せるようにドアを外しているセスナのサイドドアから足を外に投げ出し機体の端に腰かけた。最初は200mからの降下。空挺団の降下訓練高度に比べると地面がかなり近い。ジャンプのサインとともに開傘衝撃に備えて身体をくの字に締めて降下。「初降下。二降下。三降下。開傘。点検」。60式空挺傘は開傘まで4秒必要だが、この傘は3秒程度で傘が開いた。開傘速度は早い。しかし、開傘するやいなや四週を点検する暇もなく着地準備をしなくては間に合わない。100mから本当に開傘・着地が間に合うだろうかと不安になったが、やるしかない。2回目の降下の準備に移る。レッド・デビルの一人が「次は対地高度100mだから、飛び出してから地上で4秒程度しかない。ジャンプしたらフリー・フォールのように手足を大きく広げて空気抵抗を大きくした



レッド・デビルズと最終チェックを終える。

方がいい」とアドバイスを受けた。確かに少しはましかもしれない。新しい落下傘を背負って2回目の降下。100mの高度からのジャンプだ。セスナが離陸する。レッド・デビルの連中も緊張しているのが分かる。セスナは高度100mでの飛行態勢に入った。地上にいる人の顔がはっきりとわかる高さだ。ジャンプサインがあった。俺は、躊躇せず両手両足を大きく広げて思いっきりセスナから飛び出す。「初降下。二降下。三降下」。物凄い勢いで地面が目前に迫ってくる。開傘衝撃がない。「駄目だったか！」と思った瞬間、開傘衝撃とともに地面にたたきつけられ気を失う。

気を取り戻すと、俺は地面におおむけになり身体の上に落下傘が被さっていた。「生きていたか」と思いながら起き上がり傘をたたむ。「ところで、レッド・デビルの連中は大丈夫だったか」と周りを見回すが見当たらない。そうこうしているうちに、着陸したセスナから彼らが降りて走って俺に近づいてくる。「よく生きてたな」「すばらしい！」と叫んで握手やハグをしてきた。どうやら、セスナから見ていた彼らには、落下傘が完全開傘する前に俺が地上に打ち付けられて死んでし

まったように見えたらしく、彼らはジャンプしなかったということだ。俺は答えた「日本のサムライはこれぐらいでは死なない」。

その夜は彼らのおごりでどんちゃん騒ぎ。世界中、軍人同士はすぐ意気投合できる。特に勇気ある行動に対しては国境を越えてレスペクトするのが当たり前だ。

その後、自衛隊の装備行政の常識を覆してフランス製のパラシュートが新空挺傘として採用された。もちろん、ギャーギャーと騒ぐ薄汚いやつらはいっぱいいいたが、戦後憲法下で戦争をやる気もない仕組みの中、実戦のための装備を導入できたことは意義あることだった。

この傘の導入は、素晴らしい隊員達の協力があったからこそできたのだが、俺が本当に素晴らしいと思ったやつに限って、自衛隊に愛想を尽かして辞めていった。戦争を放棄した戦後憲法に甘んじ、戦争をしない防衛政策と戦争を想定しない装備行政の中で、戦争を想定しない訓練に明け暮れる自衛隊に、本当に国を愛し命をかけて国防の任務を全うしたいと思うやつは自衛隊に幻滅して辞めていく。これは本当に大きな国の損失だ。彼のような本物の戦闘者が日本のために命を尽くせる場所を作りたい。このことが、俺に特殊部隊の設立を決心させた。それから10年後、特殊作戦群の創設に繋がることになる。



セスナに搭乗する筆者。



降下地点で無事を知らせる筆者。